

法道仙人と陰陽道

尾田武雄

はじめに

砺波市芹谷にある高野山真言宗千光寺は、大宝二年（七〇二）に天竺の僧法道仙人によって開かれたという伝承を持つ古刹である。法道仙人の開基伝承等を持つ寺院等は、北陸では能登半島の頸部にある石動山の天平寺が有名である。また富山県内でも氷見市小境の浄土宗大栄寺、小矢部市観音寺町本覚山観音寺、射水市八幡町の放生津八幡宮近くにある高野



山真言宗光明寺等がある。

法道仙人は鎌倉時代に撰せられた虎関師著『元亨釈書』に載せられている。それによると播磨の国で飛鉢の法をよくし、一面観音信仰を伝えた仙人で、法華山一乗寺を開いた仙人として知られ、鎌倉末期から南北朝期には播磨の有名山岳寺院二十数カ寺を開いたという伝承が成立している。この播磨で古くから広く知られた法道上人であるが、北陸の富山県砺波芹谷に飛び火したように、なぜ法道仙人伝承が残っているのか疑問に思っていて、それを究明することが、この地方の古い民間信仰に触れるきっかけかと思っている。

法道仙人研究史

法道仙人に関しては、田中久夫御影史学研究会主宰代表理事が積極的に調査研究を進められている。「観音信仰と播磨の法道仙人」・「能登法道仙人と十一面観音」・「播磨・但馬の山岳信仰―法道仙人と牛頭天王（広峰社）―」・「法道仙人と播磨の陰陽師」・「法道仙人と毘沙門」・「播磨の陰陽師」等があり、また

・日本歴史学会編集『日本の歴史』（昭和五三年）

・田中久夫編集『御影史学論集6』（昭和五五年）

・五来重編集『山岳宗教史研究叢書16 修験道の伝承文化』（昭和五六年）

・田中久夫著『年中行事と民間信仰』（昭和六〇年）

・仏教民俗学体系編集委員会編『仏教民俗学の諸問題』（平成五年）
・播磨学研究所編『はりま陰陽師紀行』（平成一七年）

沖浦和光氏の『陰陽師の原像』（平成十六年）もある。法道仙人を古代中世の民間信仰からのアプローチとして興味深いものがある。田中久夫氏の「能登法道仙人と十一面観音」は兵庫県の西国三十三カ所観音札所の霊場が番外の花山院、二十五番御嶽山清水寺、二十六番法華山一乗寺、二十七番書写山円教寺の四ヶ寺あり、そのうち花山院、清水寺、法華山の三ヶ寺までが法道仙人開基とし、円教寺だけがそのことを言わないとされ、観音信仰を伝えたのが法道仙人とされている。

播磨・但馬・丹波に広くその信仰を集めた法道仙人であるが、遠くは大阪府堺市南区鉢ヶ峯にある高野山真言宗鉢峯山法道寺、また新潟県糸魚川市御前山村天台宗御前山雲台寺が開基としてゐる。そして石動山天平寺には「古縁起」と「新縁起」があるが詳しくは後ほど述べたが、古縁起は文明十一年（一四七九）に書写されたものが最古である。特色は開山を方道（法道）、中興の祖を智徳と説くことにある。一方新縁起は、近世初期の承応三年（一六五四）三月の、晩年の林道春が、加賀藩の前々藩主前田利常の要請で作成されたものであり、白山を開いた泰澄が、続いて石動山に登り、仏神の世界を構築したと説いている。田中氏は、古縁起や氷見市小境の大栄寺の縁起などこの法道仙人を十一面観音の帰依者であるとされている。それは飛ぶ大鳥を見て、物言わぬ人が口をきいたとされることから、法道上人

の仙法によって治癒した話を伝えていることから、病気の治癒の願いをかなえる菩薩であるからだと言われている。

ところで「播磨・但馬の山岳伝承―法道仙人と牛頭天王（広峰社）―」では、法道仙人は観音の帰依者であり、飛鉢の法をよくし、病気を治癒することで知られた仙人とされている。疫癘神を統括する牛頭天王の支配していた地域を法道仙人が譲り受けたという伝承が播磨に広まり、法道仙人伝承を伝えた人々が、兵庫県加西市坂本町の法華山一乗寺よりながら、疫病消除のことに従事したとされている。また播磨では強大な勢力を平安時代以来、広峰社は牛頭天王を祀る神社として室町時代にいたるまで大変栄えており、法師陰陽師が活躍していたとされている。播磨の陰陽師が中央に現れてくるのは、阿部清明がなくなる寛弘二年（一〇〇五）九月以前のこと、芦屋道満が現れる頃だとされ、広峰の牛頭天王の世界へ十一面観音信仰が播磨に広まっていったのが一〇世紀で、法道仙人の十一面観音であったとされている。

それが「法道仙人と播磨の陰陽師」に受け継がれ、一一世紀初頭に播磨の明石にあって陰陽の術によって海賊を捕えたりして活躍した陰陽師智徳法師がいる。播磨の明石は陰陽道の一つの中心地であった。播磨の智徳と同時代に芦屋道満がおり、陰陽師安倍晴明に匹敵し得るほどの人物であったが、晴明にや

ぶ播磨で生涯を送り、播磨では道満の祖と仰ぎ陰陽師集団があったとされている。

この道満は法華山一乗寺の法道仙人から陰陽術を学んだとしており、阿部晴明と共に播磨の陰陽師の実力派として著名になり、陰陽師集団の始祖的位置をしめされたと考えられ、道満は明石で活躍した智徳と同一人物であると思われる趣があるとされている。また法道仙人と牛頭天王とのかかわりや飛鉢についても紹介されている。

『陰陽師の原像』は、それを受けて堀一郎著『我が国民間信仰の研究』での一文「何故か播磨国は中古陰陽師の一大中心地たりしかの感がある」を引いて、芦屋道満について言及されている。『渡来の民と日本文化』では渡来文化としての陰陽道、播磨の広峰神社の御師などについて詳細に論述されている。そして『陰陽師紀行』で、夢枕獏、沖浦和光、田中久夫、田中貴子、酒向伸行、木場明志氏らの播磨と陰陽師、広峰信仰などに集約されて、現在の播磨の陰陽師研究の現状を提示された。

法道仙人と石動山

・法道仙人

能登半島の頸部に位置し石川県と富山県の県境に石動山があり、古くから山岳信仰の山として知られている。古縁起では法道仙人開基説を説いている。文明十一年（一四七九）に書写さ

れたものが最古であり、橋本芳雄氏はこの縁起の文章は長文である上に、和臭に満ちた、満ちた晦渋難解な漢文であるとされ、要点を略述されている。

① 南閻浮提に護命石とて三個の靈石あり、三千世界の万物の種子を生じ、万物の生命を司る。この三石を朝字石・動字石・竹字石という。動字石は石動山の金剛証大宝満宮にあり、朝字石は阿逸多王宮にあり、竹字石は岩金島宮にある。この三石は日・月・星の精である。

② 三石の威徳、福祐自在の徳を与え給うのが天目一箇命であり、この命がこの峰に坐すから金剛証宝満峰石動山という。

③ 第十代崇神は、天照大神宮の神勅により、諸国に神社を造られた時、第十三番の社を当山を造り、法道仙人に命じて之を祭らしめられた。

④ 崇神天皇六年、石凝姥の初子を召して真経津鏡を鑄させ、天目一箇命の初子を召して神代剣を鑄させ、当山に鎮納された。同年三月十三日宝満宮の立柱、四月晦日上棟、六月十三日御鎮座があつた。

⑤ 法道仙人は天竺摩訶陀国にて仙術を行うこと七百年、一劫を経て日本に飛来し、第九代開化天皇の御代に越中州鈴御埼に住んでいた。

。「石動山縁起と五社権現」『白山・立山と北陸修験道』（昭和五二年）・『国指定史跡石動山文化財調査報告書―八代仙ダム建設調査関連―』（平成元年）には古縁起の訓読文が載せられている。

⑥ 第十一代垂仁天皇の王子誉津別王が三十歳になっても物を言わぬので、法道仙人は勅を受けて宝満宮の御宝前で、仙法を以て祈祷した。その功験あつて、王は空飛ぶ鵠を見て、「あれは何か」と発言され、その後法道仙人は天竺に登つて日本を去つた。

⑦ その間三十代八百八年、神威参を以て護持となす。四十四代元正天皇の靈龜二年、役行者が石動山に來り、宝満宮において求聞持頭巾法を修した。

⑧ 靈龜二年、元正天皇は法道仙人が登空したことを尊敬し、越中四郡を割いて能登国を設けられた。

⑨ 宝満大権現の神託により、元正天皇は智徳上人に優婆塞陀太朝の号を賜つた。養老元年、太朝大師は石動山に登り、求聞持頭巾法を修した。

⑩ 天平勝宝八年六月七日、大礼堂を造新した。第四十六代孝謙天皇は勅使として左大臣藤原家通を石動山に差遣された。家通は天平宝字元年三月十一日に到着し、大宮坊に宿した。

⑪ 勅使家通は宝満宮の扉を開き左の直宣を告げた。(略)

⑫ 勅使参向のもとに知伝上人が求聞持頭巾法を修すると、神靈たちまち虚空蔵菩薩となつて現れ給うた。家通は神感の応えて勅奏に及び、四方九里を神域と定められた。

⑬ 孝謙天皇の宣旨によつて、天平宝字七年に二位の宮、三の宮が造営され、重祚の祈願が宝満宮で行われた。

⑭ 祈願の効験があつて、天平神護元年、天皇の重祚が実現する

と、一山の寿命として太朝大師に宝満宮の六句偈が授けられた。

⑮ 大宝満宮権現は重ねて勅託あり、

⑯ 当山大宝満宮の相殿には、九神九曜星がましまし、正殿大宝満宮の本地仏は虚空蔵灌頂仏であり、五仏を戴き、他に二位宮、三宮にはそれぞれ十六神を祀り、総山中には一千二百二十一社、湯津石村は八万三千、山神の護法は木火土金水、神所は山の如き石を生じ、貴むべき所である。

古縁起の概要であるが、神変怪異で到底史実とは無縁であり、虚構に満ち満ちているが、ここにはなにかのメッセージ性が秘められているように思われる。「三石は日・月・星の精である」、「山神の護法は木火土金水」などに陰陽道の雰囲気を醸している。また法道仙人は、播磨では陰陽道の祖として知られた人物である。

さて、新縁起であるが、加賀藩三世前田利常の懇請によつて、幕府の儒官林道春が承応三年（一六五四）に執筆したものであり、古縁起の書写より一七五年遅れてのものである。橋本氏の解説によると、石動山は泰澄法師の開くところで、その祭神は白山靈神である。本地が十一面觀音で、能登島より臥行者が白山に登つて泰澄に随従した。臥行者は米を空中に飛ばし白山に運んだなど書きされている。『元亨釈書』や『泰澄和尚伝』などの引用が目につき、白山の勢力を誇示するような創作が綴られている。古縁起に石動山の信仰のありようが息づいているよう

に思われる。

・飛鉢仙人

修行僧が鉢を飛ばし布施を得るといふ飛鉢の法は、平安時代からの呪法であった。『本朝神仙伝』の比良山の僧某や『今昔物語』『宇治拾遺物語』に紹介されている信貴山の縁起などが知られている。特に法道仙人の飛鉢は著明であり、『元亨釈書』でも詳しく述べている。飛鉢仙人とも呼ばれている。この飛鉢の法と海上交通とのかかわり説いたのが兼康保明氏である。白山を開いた泰澄の弟子臥行者の飛鉢、九州英彦山などに飛鉢伝承が残り、播磨、九州、北陸また新潟県の米山と続き、山を目印としての海上交通の奇跡が垣間見ることができる。石動山でも新・古縁起にも飛鉢の法道仙人と臥行者の説話を載せている。

陰陽道と法道仙人

陰陽道関係における研究は目覚ましいものがあり、その成果を深化をみせているが、だが曖昧模糊の陰陽道とは如何に定義づけるかについて明確な答えが見いだせないのが現状であろう。通説では、中国古代の陰陽五行説にもとづいて日時や方角の吉凶を占い、祓いや祭祀を行う俗信とし、平安時代になると占術に卓越した賀茂忠行、保憲親子が現れ、その弟子の安部清明や

○「飛鉢伝説と日本海」『日本海文化研究所公開講座平成一八年度記録集 山から見た日本海文化Ⅱ』（平成一九年）

賀茂光榮に引き継ぎ、平安時代末期になると陰陽道に天文道と曆道を、天文道の安部家と曆道の賀茂家の二大名家が陰陽道を独占しました。明治時代には新政府は陰陽道を廃止させたが、陰陽道の影響は今でも存続している。『今昔物語』には官人の晴明らとともに民間の「法師陰陽師」や「隠れ陰陽師」などが登場する。

牛頭天王

播磨国の現在兵庫県姫路市の広峰山山頂には広峰神社がある。全国にある牛頭天王の総本宮である。京都の八坂神社も総本宮を主張しているがこの神社は別称広峯牛頭天王とも言われている。古くから陰陽道の人々集まったところであり、陰陽道、修験道の修行の場として「山」全体がその信仰を支えていたのである。伊勢や白山の御師たちのように、広峰を本拠地とする宗教者たちの旦那場は全国に広がっていたと考えてよい。二

陰陽師の蘆屋道満流と安倍晴明流の集団は『今昔物語』・『古事談』・『峰相記』にみるように対立するものであり、道満が天竺の僧法道仙人から陰陽術を学んだとされその系譜を持っている。牛頭天王は陰陽師智徳法師が活躍した明石から移ってきたもので、播磨の蘆屋道満は播磨の陰陽師の始祖的位置を示されているが、道満は明石で活躍した智徳と同一人物であると思わ

○川村湊著『牛頭天王と蘇民将来伝説―消された異神たち』（平成一九年）

れる趣があると田中久夫氏は推察されている。

法道仙人は『元亨釈書』で多門天王と西峯にあらわれた牛頭天神の守護を受けて、印南郡の法華山一乗寺を中心として活躍した仙人であると記されている。『簠簋内伝』の「祇園牛頭天王縁起」と同じ蘇民将来の話と関係して、特に『元亨釈書』の徐病の役割を荷ったとある。さらに「祇園牛頭天王縁起」には次のように吉備大臣と関係をさせた。

爰吉備大臣詣至靈壇。其時天王親告曰。我是牛頭天王。本師薬師如来也云々。

このように考えると、牛頭天王は吉備氏と共に播磨の明石に来て、印南郡を中心に信仰を集めていた。その所へ、印南郡の法華山一乗寺へ法道仙人伝説を持つ人々がやってきて活躍を開始した。これが法道仙人と牛頭天王の関係を語る話ということになる。この法道仙人に乗って活躍していたのが、賀茂安倍氏と別系統の鰐磨郡に住む陰陽師たちであった。¹³つまり、牛頭天王信仰を広めたのは朝廷の陰陽寮にいた官人陰陽師ではなく、在俗の下級陰陽師だったと思われるのである。

また播磨国は、古代から朝廷に仕えていない民間陰陽師の一

¹² 田中久夫著「法道仙人と播磨の陰陽師」『年中行事と民間信仰』(昭和六〇年)

¹³ 田中久夫著「法道仙人と播磨の陰陽師」『年中行事と民間信仰』(昭和六〇年)

大拠点であったことは沖浦和光氏¹⁴述べられ、そして官人であった安倍晴明も、民間陰陽師のシンボルとされた蘆屋道満も、いずれも大陸・朝鮮半島からの渡来系の文化の流れと深く関わる出自だったと想定されている。

さて、石動山や千光寺にまつわる法道仙人の伝説は、このような蘆屋道満系の民間陰陽師が伝えたのであろうと推察される。また千光寺とかかわりを持つ牛嶽周辺には牛頭天王の堂宮が広く展開しておりかかわりが注意される。

陰陽道を布教したしたのは、どういう出自の集団だったのか。〈古代の巫覡↓中世の民間陰陽師〉という系譜も想定され、この流れは朝鮮の高句麗・百濟・新羅・加耶の民間信仰とのかわりが重要なのは畿内だけではなく、畿外にもいた渡来系氏族との関わりである。渡来系が大きく根を張ったのは吉備・播磨文化圏であったと沖浦氏は述べられている。¹⁵また牛頭天王もまた渡来神のイメージが強く感じられる。

石動山と陰陽道

石動山縁起は陰陽道の雰囲気を醸しており、開山を法道仙人とし播磨では陰陽道の祖として知られた人物である。また石動山の由来を説く、現在最古の資料『拾芥抄』では智徳上人が開山としている。鎌倉時代後半にはこのような認識があったので

¹⁴ 「陰陽師の実像をさぐる」『はりま陰陽師紀行』(平成一八年)

¹⁵ 「陰陽師と渡来系文化」『陰陽師の原像』(平成一六年)

あり、智徳は一一世紀中期の頃の作られたとされる『今昔物語』に記載され「播磨国陰陽師智徳法師語第十九」には播磨国の陰陽師智徳が海賊に掠奪された船主に同情し、呪力をもって海賊船を招き寄せ、貨財を取り戻してやった話である。また智徳は藤原道長の陰陽師であった安倍晴明と術比べをして敷神を奪われ弟子入りしたことも知られている。この智徳が石動山の智徳と同一とは断定できないが時代的には合致している。石動山には、このように播磨の陰陽師との開山縁起が残されているのに注意される。

さて、石動山の奥院と言われる富山県氷見市の石動山周辺に「八代仙」がある。洞窟修行場としてある。中国では「八」という数字は非常に大事にされ、八仙信仰というものが、民間に広く浸透しており無病息災、延生益寿をもたらすという八人の道教に仙人がいるといわれ、には道教的で陰陽道的なイメージがある。橋本芳雄氏は石動山には北斗信仰があり、明星信仰があるとされており、石動山信仰の今後の課題であるとしておられる。これらも陰陽道からのアプローチで解決に近づけるきっかけになると思われる。

また石動山は山岳信仰の山として知られ、修験道に通じる山伏が多くいた。村山修一氏は⁵⁾「陰陽道の日本的展開」で、「律

⁵⁾ 「石動山信仰と越中との関係」『富山県石動山信仰遺跡遺物調査報告書』(昭和五九年)

⁶⁾ 『修験・陰陽道と社寺資料』(平成九年)

令制度の崩壊に伴った下層民に転落して陰陽師や播磨の民間宿曜師・陰陽師と似た生活環境を持つことによって、法師陰陽師と山伏を区別しえないような特異な賤民職業者を作り出した」とあり、陰陽師も山伏も区別のできないような状態で、石動山にいた可能性は少なくない。伝承も多くはないが、『田鶴浜町史』(昭和四九年)には「狐女房」が載せられている。

「とんと、昔、おったとい。あるとこに、貧乏やが正直なバアサと息子とおったとい。「アンカや。かたいものの、仕事するものの、お飯食べんものの、クソばっかしく、いい嫁さ来てくれたらの」

バアサがいつも息子に、そんな事を話しておったとい。それらの。ある日、雨のシブシブ降る日やったとい。赤いバアサ着た、美しい娘が訪ねて来て、おババの思わっしゃるとおりにすっさかい、そうか嫁にしてくさんせと言うもんやさかい、嫁にしたとい。

子供が三人も出来て、家になじんでもうたとい。

ところがの、なじみ過ぎたもんやるか。あつ時のこと、うつかりしての、オンボ(尻尾) 出いて昼寝しとつたら、三人の子供が騒いでの、

「おつちや、ジャーマ、オンボ出いて寝とるじゃ」「おつちや、ジャーマ、オンボ出いて寝とるじゃ」

と手を叩いてはしゃぎ回ったとい。

そこへトオト(もう子供の父親だから)とバアサが外から戻

つてきたから、

「おら、子供に正体見られたら、恥ずかしておられんさかい、暇もろうわいけ。これから信田（しのだ）の森へ行くさかい、誰でも会いたなつたら、そこへ来てくさんせ」

と言つて、止めるがを聞かんと出て行つたとい。

それからの、田んぼすつ時がくりや、夜な夜な村へ戻つてきて、よさりのうちに田んぼしをして、信田へ帰るがやとい・今でも穂が出ると尾が出たちゆうやる。ともかくにもバアサと息子の家が、身代こしらえたのは狐の嫁さのお陰やつたとい。正直もんに、福あ、来るぞい。

それけんけん、ぼつとくそ。

これが、管見であるが、安部清明の「狐女房」を伝えたものであり、陰陽道の関連が連想される。

法道仙人を開基とする芹谷山千光寺縁起

富山県砺波市芹谷に高野山真言宗の古刹千光寺がある。寺伝によると大宝三年（七〇三）、天竺の僧法道上人（円徳または道明比丘）が開いたとされている。法道仙人は金剛摩尼の術を体した仙人で、中国を経て来日、諸国を遍歴するうち越中の般若野まで来た時東方に深い森の山があり、仙人はここにしばらく休んで谷の芹を食べ、笈を担ごうとしたところ鉄山のように重くなつた。不思議に思つたところ瀧の巖頭に不動尊が現れ、谷いっばいの金の蓮が生えた。さてはここが結縁の仏地かと喜び、

負うてきた観音をおろして寺を開いたとされる。享保一二年（一七二七）に「越之州般若野芹谷山千光寺縁起」がある。『砺波市史資料編4 民俗社寺』（平成六年）にはその白文を載せ、それを金子容士氏が訓読みされ『土蔵一二号』（平成一四年）に掲載されている。それを簡単に整理してみた。

① 千光寺の開基と法道仙人 天竺の靈鷲山に五百人の持明仙人があり、法道仙人はこれらの上位におられ、法を伝えるために天竺、中国を経て日本へ来られあまねく諸方を訪ねられた。

② 法道仙人般若野芹谷に來住 般若野の東に山があり、ここで山の神一神童に会い、山間へと誘われ、白瀧で不動尊に会い黄金の蓮が開いたので仙人は喜んで、此処に寺を開いた。

③ 空鉢仙人 常に鉢を飛ばし、官米を積んだ船に米を乞い、船頭が拒むと米俵が雁行のように南の峰に飛んで行つた。そのうち一俵が川の上に落ちた。そこが現在の高岡市米島である。

④ 法道仙人の徳 仙人の徳は広く書籍に載り、三韓來朝の高僧あれども君臣は抜任し、鬼神の守護、雨沢の延時、天皇の病氣治癒祈願、諸候の不平、苦を救い災いを払うことは、数限りはない。故に八百封戸墾田一千畝を戴いた。

⑤ 八幡放生会 法道仙人が放生津において、大放生会を行う。この地に八幡大神を勧請し、社を建立した。

⑥ 法道仙人の門生 仙人の門生には四人おられる。智徳、仙祐、道勝、道仙であり、これらは百済の僧である。仙人の遺風を

慕い来られ、越の四傑と言われた。

⑦ 芹谷山五社法継襲記 両部習合の法、神仏一派の道を伝持しており、当山の良の鎮めに五社がある。

一、 蔵王火宮の神は大物主尊、仏は聖観音

二、 大宮の神は伊弉諾尊、仏は虚空蔵菩薩

三、 鷲雄白山宮は伊弉冉尊、仏は十一面観音

四、 劍宮鷲尾権現は市木嶋姫尊、仏は不動明王

五、 梅宮良和権現は天目一箇尊、仏は將軍地藏

これら五行に通じ、伊弉諾、伊弉冉は陰陽、大物尊は火徳、天目一箇尊は木徳、金は市木嶋姫尊に配する。

⑧ 五行説 宇宙はまとめるは五行であり、すなわちそれは仏陀である。それはほぼ五義にあり、一、無上覚、二、正覚、三、等覚、四、等正覚、五正等覚なり、十一面観音を無上覚とし、鷲尾白山を地脈を縮め距離を短くする。聖観音を正覚とする。地藏を等正覚とし、不動明王を正等覚の主とする。

⑨ 千光寺歴代 大租法道仙人 第二世智徳上人 第三世仙祐上人 第四世道仙 第五世道勝上人以下五十八世まで記載

⑩ 第二世智徳 天平元年ごろ、石動山を開く、泰澄も智徳と談論しこの山に廟を作る。第八世実応は弘仁一〇年（八一九）東寺に入り、長遍の門生政遍というものである。

⑪ 千光寺本尊の盗難 文明四年（一四七四）、大永六年（一五二六）と五十世長遍代の三回本尊の盗難に遭っているが、法力により無事元に戻られている。

そのほか、千光寺興廃記、長尾景虎の父葬送、前田利長と有遍との関係、などを丁寧に記載されている。

この縁起には、石動山の関わりが強く意識されている、石動山開基とされる法道仙人、石動山の五社と同じ神仏を勧請し、第二世智徳上人が石動山を開いたとされている。これらから推察すると、石動山と本末関係にあった時期があったのかもしれない。

さて第三世仙祐、第四世道仙 第五世道勝であるが百済の僧であるらしいが、その人となりは現在、管見ながら不明である。

千光寺二祖知徳法師と蘆屋道満知徳法師

鎌倉中期に成立したとされる類書いわゆる百科事典の『拾芥抄』には、全国の有名寺院の一つとして能登国の「石動寺」として、ここでは、虚空蔵菩薩を本地仏とし、智徳上人の開山で、奈良時代末期の光仁天皇四年（宝亀四年 七七三）の開創と注記され、天平寺の名はない。石動山の古縁起で開山を法道仙人に置き、中興の祖を知徳法師としている。また千光寺は法道仙人を開基として、知徳を二祖として伝えている。

さて知徳法師であるが、『今昔物語 卷二十四 本朝付世俗』の「播磨の国陰陽師知徳法師の語十九」に出てくるが、その要約は「本話の典拠は不詳。播磨国の陰陽師法師知徳が海賊に掠奪された船主に同情し、呪力をもって海賊船を招き寄せ、貨財を取りもどしてやった話。中央の加茂、安部二流の埒外にあつ

た播磨の陰陽師の威力を伝えた一話である¹⁸。播磨国の陰陽師知徳法師として紹介されている。この知徳法師が石動山の中興の祖、千光寺の二祖と同一人物であろうか、一一世紀初頭に播磨の明石にあつて陰陽の術によつて海賊を捕えたりして活躍した陰陽師智徳法師がいるが、同名であるのが気にかかる。光仁天皇四年（宝亀四年 七七三）は虚構としても、鎌倉中期の成立した『拾芥抄』が播磨の陰陽師智徳法師の開山として伝承も年代的には不自然ではない。

蘆屋道満

道満は安部清明とライバル関係にある播磨国の陰陽師である。早くから注目され民俗学者柳田國男の娘婿の堀一郎は『我が国民間信仰史の研究』の「陰陽師村と清明塚」で次のように書かれている。「清明に験くらべを挑んで敗退した播磨国の陰陽師智徳や、顕光の請によつて道長を呪祖せんとして清明に露わされたる同じく道摩法師あり。野々宮左府公継の一つ位に至るべき占ひたる播磨の相人なり、更に遡つてはかの内記入道寂心（慶滋保胤）に叱咤せられし播磨国の陰陽師法師あり。何故か播磨国は中古陰陽師の一中心地たりしかの感がある」としてこの系統に糸を引くと思われるものに蘆屋道満伝説が伝えられているとある。そしてこの道摩法師（道摩は道満と同一人物であろう）や智徳法師は、法道仙人の流れをくむ陰陽道であり、広峰社の

牛頭天王と深いかわりを持つのである。

ところで石動山の古縁起には先に述べてように、陰陽道の雰囲気が一貫して流れている。「この三石の靈石を朝字石・動字石・竹字石という。動字石は石動山の金剛証大宝満宮にあり、朝字石は阿逸多王宮にあり、竹字石は岩金島宮にある。この三石は日・月・星の精である」また「山神の護法は木火土金水」な星や五行説が秘めている感がある。橋本芳雄氏は¹⁹三石を日月星の精で、万物の生命を司るといふ、星辰信仰・星宿信仰・占星術に関係ありと考えられるとされおり、陰陽道の世界を匂わせている。

千光寺の大租が法道仙人であり、二世が智徳上人である。そしてともに石動山の開基伝承を持ち、播磨国の陰陽道の祖とされる仙人たちである。

田中久夫氏はその著「法道仙人と播磨の陰陽師」と智徳は播磨の民間陰陽師蘆屋道満と同一視されているが、道満は法道仙人の弟子とされ天文・暦学学んだとされているので、興味深い。²⁰これは兵庫県佐用町の「道満塚」と「清明塚」の祭祀を担っている上田家に残る安政三年（一八五六）の由緒に記されている

¹⁸ 『石動山縁起と五社権現』『白山・立山と北陸修験道』（昭和五二年）

¹⁹ 『年中行事と民間信仰』（昭和六〇年）

²⁰ 沖浦和光著「近世『役者村』の起源」『陰陽道の原像』（平成一六年）所収

ものである。法道仙人の後道満つまり智徳が継いだという伝承も注目される。これは沖浦和光著『陰陽師の原像』に上田家の子孫上田賢治氏が『播磨』第六二号（西播磨史談会）にその由緒が掲載されている。これは田中久夫氏の前著でも紹介されているが、重用なので掲載する。

一、当国印南郡芦屋之里ニ村主清太之後胤也 此清太常ニ天文ヲ心ニ加希年来学居処天之助希成かな法道仙人に出逢天文地理易曆を学び書典に志るし家に伝へしを道満学熟して大旨ヲ達シ私ニ法道仙人之弟子成と号法道之道之字ヲ取り道満法師と名附たり 天文曆覚当時加たるを并物なし 志かるに都に於いて安部清明儔士ニ升進世しと其聞へ四海満たり 何卒其清明と云ひ者と法力を争ひ我茂儔士之望起シ都江登り清明ニ対面之上御前ニ出法力を□ニ争い負を取時ニ清明之弟子ニ成星霜ヲ送り 或時清明帰朝之後同人妻之加をかたらひ 大唐より清明伝授セシ秘書不残写とる或夜清明大酒熟し折ヲ見合秘書之論争ひ清明を争い負し為其首尾ヲ取り五条河原ニ埋志りるニ 大唐之伯道此之事を志里宗の太宗皇帝之御時太平興国元年十一月に押渡り□ハ清明之あだななりと言ふらし論を仕か希 つひに伯道のために空敷成給ひしなり 御ひよふハ五条河原道北に埋と在

安政三年丙辰四月

大唐之年号と合ヒ年号 此書物作州川原村神之進殿より

伝授写し

貞元二年 安政五年迄二八百八拾式歳相成

ここで注目されるのが、道満が法道仙人の弟子であることである。また田中久夫氏の道満と知徳法師が同一人物である場合、石動山の古縁起や千光寺の伝承、つまり開祖法道仙人から中興の祖または二祖知徳法師の繋がる道筋が、播磨系の陰陽道の系列に辿ることができ貴重であると思われる。そして法道仙人から知徳法師（道満）へと続く系譜を伝承している播磨の陰陽師つまり民間陰陽師が石動山や千光寺に残したのではないだろうか。

牛頭天王

牛頭天王については川村湊氏著『牛頭天王と蘇民将来伝説』（平成一九年）に詳しく論述されているが、まず牛頭天王について説明しておきたい。播磨国広峯山にある広峯神社が牛頭天王総本宮とされ、京都の祇園社の総本山八坂神社としており、詳しいいきさつは割愛したい。日本陰陽道の祖とされる吉備真備は霊亀二年（七一六）に入唐し、在唐すること一八年、儒・仏・道、そして陰陽道、宿曜道を日本に広め、素盞鳴尊を牛頭天王・天道神とした。牛頭天王信仰は広峯を中心に根拠地とし、修行の場としてこの山があったとされている。これを伊勢や白山のような御師と呼ばれる修験系の人々に占卜、加持祈祷の民間信仰として広めていった。そして瀬戸内海の山陽道ルート東漸してきている。また『阿弥陀経』の伝える「祇園」があるが、そ

の祇園精舎の守護神とされるのが牛頭天王で、もともとはインドにあった牛頭山からとられた名前だとされている。牛頭山は薬としての梅檀樹が多く生え、「牛頭」という名前と病気を治すという医薬との結びつきが生じたといわれている。ただし、インドに「牛頭天王」という神仏がいたわけではなかったようである、その形態は後の漢訳仏典において大威徳明王とされた。¹³牛頭天王＝祇園神とは、天竺つまり、インドから渡来した神であり、牛頭天王の本地仏は薬師如来である。

千光寺周辺の堂宮

正徳社号帳

「正徳二年九月堂宮社人山伏持分并相守申品書上ケ申帳（俗に「正徳二年社号帳」という）が砺波郡に関するものが富山大学附属図書館蔵の川合文書の中にある。砺波郡には七六五の堂宮が報告されている。砺波郡にあつては伊勢系の神明に関わる堂宮が二四七社あり、砺波郡全体の三二%を占めている。その多くが近世にはいり展開したものとされる。千光寺周辺の砺波郡における五四村落¹⁴の堂宮一一五社を整理してみると、神明が三六社でやはり最も多く、次いで八幡一九社、五社権現（五

¹³川村湊著『牛頭天王と蘇民将来伝説―消された異神たち』（平成一九年）

¹⁴この村落は、砺波郡にあつた京都の公卿徳大寺家の荘園域内の村落を目安とした

社を含む）一〇社、宇志多気権現（牛瀧を含む）・観音五社、大日・山王が三社、諏訪・熊野三社・薬師・地藏・毘沙門・火宮がそれぞれ二社ある。特徴的で地域的なのは五社権現、宇志多気、火宮であろう。

五社権現は能登半島の頸部に石動山があり山岳信仰の拠点として栄え天平寺があつた。最盛期の中世には北陸七カ国に勧進地をもち、院坊三六〇余り、衆徒約三千人の規模を誇つたと伝えられる。山頂には伊須流伎比古神社があり、祭神は五社権現と呼ばれ、修験者たちを通じて北陸から東北にかけて分社して末社は数多くある。南北朝期と戦国期に二度の全山焼き討ちに遭い、また明治の廃仏毀釈によつて壊滅した。鎌倉時代末の永仁三年（一二九五）と推定される「権少僧都相助奏状」に「能登国石動山五社」とあり、さらに南北朝期には「五社権現」と称されるようになったとされている。¹⁵「正徳社号帳」の五社権現は石動山の末社である。また火宮も五社権現の一社を勧請したものである。観音五社、大日・薬師・地藏・毘沙門などの仏教的な堂宮も、石動山信仰の影響下にあつたものと推察される。

宇志多気が五社あり、これもこの地域独特の堂宮にあたる。富山市（山田）・砺波市庄川町・南砺市利賀村の三町村の境にある山が牛岳である。標高九八七メートルで、山頂には大國主命

¹⁵『鹿島町史通史・民俗編』『鹿島町史・石動山資料編』

を祭神とする牛嶽権現堂があり、この山に関わる信仰が宇志多気である。牛嶽の山名の初見は「康富記」の宝徳二年（一四五〇）の七月の条に「越中国奇異事 十六日戌午晴陰、後日人々語説、今日於越中国、有不思議、大風大雨之中、牛嶽ト云所ヨリ光物出、其体雲中鬼形有之、指良飛行、其間十里許也、山河草木悉損失云々」とある。牛嶽より雲中鬼形の光物がいわゆる鬼門の良（北東）に向かって飛行し、十里ほどにわたり山河の草木が悉く損失を受けたというのである。いかにも魑魅魍魎とした陰陽道の世界が漂っているようにイメージされる。風の吹いた牛岳の北東の方向には山田川、室牧川がありその下流は井田川方向に当たるとある。ここには牛嶽社が多く分布しており、牛嶽（宇志多気）信仰圏だったのだろうと想像される。牛嶽社は現在富山市（旧婦中町・旧山田村・八尾町など）、砺波市などに四〇余社があり、その大己貴命（大国主神・大穴持命）である。⁵⁵ この牛嶽は千光寺との関わりについては、牛岳の麓にあたる富山市山田村若土に元千光寺があったとされ、また牛岳中腹の砺波市庄川町湯谷の奥に千光寺の開祖とされる法道仙人が修業したとされる「大窪の滝」がある。また千光寺に所蔵される県指定文化財「絹本着色大威徳明王図」があり、牛嶽信仰の遺物

⁵⁵ 牛嶽信仰については河合久則著「牛嶽（牛岳・宇志多気）」『砺波市史資料編4 民俗・社寺』（平成六年発刊）、佐伯安一著「飛越奥山と山岳信仰―牛岳を中心に―」『白山・立山と北陸修験道』（昭和五二年）がある。

と推理される。また射水市下条（旧小杉町）には高野山真言宗薬勝寺があり、寺に隣接して石動山と関わりがある日宮社がある。ここは千光寺の前を流れる和田川の田流域にあたり、この薬勝寺にも大威徳明王が保持されており、牛嶽信仰と石動山信仰の両者に影響を受けている。さてこの大威徳明王であるが、陰陽道の中心的な広峰神社では黄牛に乗る牛頭天王を祀るが、千光寺や薬勝寺の牛に乗る大威徳明王とのイメージがダブって意識される。

さて、牛嶽を婦負郡側から眺め論究されたのが久保尚文氏である。⁵⁶それによると富山市呉羽小竹の姉倉比売神社の祭祀圏について述べられ、①小竹社が所在する呉羽丘陵西部地域での分布もあるが、呉羽丘陵東部地域、山田川・井田川の沿線に顕著である。②旧山田村、旧婦中町、旧八尾町に多く分布し、ことに『康富記』宝徳二年（一四五〇）記載の牛嶽光物伝承を自社のこととする山田村湯の社など代表的な場所を持ち宮としている。また、婦中町上野・皆杓の両社が龍王社を称するなど水源神と目されること。③射水平野部の分布も多いこと。その多くが近世開拓村であることなどが特徴とされている。近世初期の婦負郡北部、射水郡東部の四万石を生みだした牛ヶ用水は、難工事の場所に牛の首を埋めよとの牛嶽明神の神宣を得て開削されその川名となったとされている。そして小竹姉倉比売神社の

⁵⁶ 「姉倉姫神社祭祀圏と牛ヶ首用水開削」『越中富山山野川湊の中央史』（平成二〇年）

神職若宮氏の祖先伝承から京都伏見稻荷神社に繋がる伊呂俱の伝承があるとされている。姉倉比売神社祭祀圏に色濃く牛嶽信仰があり、下村加茂神社の由緒にもみられ、射水平野の水利権に結びついていくとのである。

『富山縣神社誌』によると、小竹姉倉比売神社の宮司若宮氏の持宮が呉羽丘陵東部地域、山田川・井田川周辺の牛嶽社・八坂社などが多く展開している。その祭神が素盞鳴命・大己貴命がほとんどであり、注目される、なぜならば素盞鳴命の本地仏が牛頭天王であり、牛頭天王の別名大己貴命との説もある。またこの地域には八坂社も多々展開しており、その祭神が素盞鳴命であり、陰陽道との関わりが察しられるがその資料は見当たらない。

薬師は「正徳社号帳」には塩ノ谷村と三谷村に各一社あり牛頭天王は祇園天神とも称し、京都祇園社の祭神であり、「祇園牛頭天王縁起」によると、東方淨瑠璃世界の教主薬師如来の垂迹とされており、本地仏は薬師であるともされている。また五来重氏は、「山の薬師・海の薬師」があるとされ、海の薬師では越後の米山薬師は、山上にありながら海上航海者の目印にとり、漁民の信仰を集めた。京都松原通烏丸の因幡薬師は、中世まで京都随一の薬師如来として、病の平癒を祈る人々の夜籠りが絶えなかった。海の薬師の原像を、少名毘古那の神とされ、海よ

り来る「帰り来る神」、「常世」へ去った神とされ、この薬師は海から来た仏である伝承を持っていた。海の彼方の楽土から幸せをもたらし、童宮の原像の常世に通じるとされている。また村山修一氏⁸⁾「薬師信仰と陰陽道」で薬師信仰が道教的思想を随伴しているとされている。

塩ノ谷村つまり現在の砺波市塩谷また庄金剛寺は砺波市庄川町庄金剛寺であるが、千光寺から近くまた石動山の分霊社である五社権現があるところでもある。牛嶽信仰にも大いに関わりのある地域である。

天神と戎、住吉 「正徳社号帳」には、その他仏教的な堂宮に大日三社、地藏三社、毘沙門二社、弁財天一社などがあるが、興味深いのが、千光寺に近い別所村に天神がある。現在の砺波市東別所の上村に位置する。和田川が「く」の字に曲がるところの小高い山の中腹にこの神社がある。ちょうど南向きであるがこの前が「ミヨウケン田」といわれる所で、現在砺波市久泉にある別所山光円寺の開祖妙見の住んだ地とされている。また天満宮の北側の山腹にテラス状の所があり、そこが光円寺跡として伝えられている。この天神が妙見と多いに関わりが意識されるのである。ちなみに妙見菩薩は北極星あるいは北斗七星を人格化した菩薩である。現在天満宮として祭神は菅原大神、天穗日命、水波能売命の三柱が祀られているが、古い時代には単

に「天神」つまり天の神を祀っていたのであろう。これも陰陽道のイメージを醸している。

戎は砺波市太田の現在の金比羅社に位置するところにあつたと思われる。この戎は砺波郡七六五社の内二社しか見当たらない珍しい堂宮である。他一社は南砺市利賀村岩淵である。戎は恵比寿であり、七福神の一柱で狩衣姿であり、右手に釣り竿を持ち左わきに大きい鯛を抱えたる姿をイメージされ、豊漁の神として認識されている。しかし外来の神や客神や蛮神との知られている。山奥の利賀村や太田にあるということは、海の神というより、渡来の神として祀られたと思われる。また北見俊夫氏は「エビス」という語源をさぐってみると、蛮人・外国人を意味し、エビスは蕃神ということであつた」とされている。そういえば陰陽道はこのような渡来の人々によつて伝えられ、広められたとされこの戎も、そのような古い堂宮であつた可能性もうかがえられる。ちなみに蛇足であるが同氏編『恵比寿信仰』収載の大江時雄著『藤浪時綱と田中信謹』のエビス神考証では「恵比須は太田命」としており、また「恵比須」は「金比羅神」ではないかとも考察されている。地名と現在に神社との関連に興味深い。

またこの太田地区には農村部では珍しい住吉が一社あるが、祭神は底筒男命、中筒男命、表筒男命の三神である筒とは星の

ことであり、底中上の三筒男は、オリオン座の中央にあるカラスキ星で航海の目標としたところから、航海をつかさどる神とも考えられる。

姉倉比売神社の若宮氏 久保尚文著『越中富山 山野川湊の中世史』(平成二〇年)によると富山市呉羽小竹にある姉倉比売神社神職若宮氏が伏見稻荷神社の秦氏と同様な祖先伝承を持つとされている。前述したように若宮氏は牛嶽を源流とする井田・山田川に点在する牛嶽社を持ち宮としている。また若宮伊呂俱御戸代田官幣宣旨を受けて治めたという富山市婦中町速星には延喜式内社速星神社が、これもまた若宮氏の持宮であり、この周辺の祭祀権を握っていたと思われ、近世初頭の地域の再開発事業の取り組みの初めは難工事の際に、牛の首を埋めて完成された牛ヶ首用水開削事業があるが、これもまた若宮氏の祭祀に拠つたとされている。この若宮氏と陰陽道が気になるところである。

また同書は呉羽丘陵の水の便が悪く、古来溜池灌漑が広く行われていたとされ、武内淑子著『呉羽の塚』で、「獅子舞塚」を言及され、小竹村に陰陽道を奉じる安部主計という人物がいて、姉倉比売神社の春祭りの御神幸行事に周辺八か村より神馬八頭が献上され、塚の上で獅子舞が行われるようになったという。

この安部氏は海老江加茂社の棟札などに登場する人物であると言う。現在富山市寒江本郷と中沖に二上神社があり、ともに姉倉比売神社若宮氏の持宮で、安部氏は高岡二上荘を管掌した陰

陽道家の土御門家であり、射水湿原地帯に展開した二上神社の祭祀を司り、中世における陰陽道安部氏の祭祀と若宮氏の神祇支配との関係は詳らかではないとされているが、示唆に富み興味深いものがある。

稲荷 稲荷研究者の大森恵子氏著『稲荷信仰の世界』（平成二三年）によると伏見稲荷社の祭祀由来伝説から「秦氏の祖先である伊侶俱（巨）が餅を的に矢を射たところ、餅の的（穀霊神）は白鳥となつて稲荷山の一ノ峰に翔びあがり、留つた地から『伊彌奈利』、つまり稲が生えてきたのでその地に社を建立して『いえなり』社を奉祭した。（略）渡来人である秦氏の氏神的稲荷信仰がさかんであり、農耕神や養蚕守護神・絹織物機織り守護神などとして稲荷神は信仰された」とある。延喜式内社速星神社の祭神は現在五百箇磐石尊であるが、元は稲倉魂神であり、稲荷神である。「正徳社号帳」によると常国に稲荷大明神、三谷に稲荷が各一社ある。

渡来人と民間信仰

陰陽師は渡来系文化の代表的な人々であつたことは、中世から近世にかけて播磨は民間陰陽師の一大中心地であつたことは堀一郎、沖浦和光氏等の研究でその実態はかなり明らかになっている。和銅六年（七一三）の官命によつて編纂された『播磨国風土記』には、多くの渡来集団や渡来系人物が登場し、関連する記事が約四〇もあるという。編者とされる楽浪河内も渡来

系二世である。⁸⁰新羅の王子とされる天日槍の渡来神話はその代表的である。また広峰神社のある広峰山は元新羅国山と呼ばれ、広峰山一帯を新羅国と称していて、渡来系の人々が居住していた地ともされている。陰陽道の祖とされる吉備真備は渡来系とされ、広峰神社創建伝承が残されている。安部清明や蘆屋道満もまた渡来系であつたろうとされている。そういえば修験道の祖役の行者の弟子韓國連広足の訴えにより、鬼神を使役し民を惑わしたとして朝廷に捕えられているが、この弟子もその名から渡来系氏族と思われる。このように陰陽師は渡来系の人々により伝え継がれてきたと思われる。

さて、北陸は古くから大陸からの表玄関であり、越前や加賀・能登・越中には渡来伝承が多く残されている。石動山のある能登半島には、渡来系と思われる神社やお祭りが多く残されている。それについては浅香年木氏⁸¹や高瀬重雄氏⁸²等の業績がある。高瀬重雄博士古希記念論集観光会編『日本海地域の歴史と文化』（昭和五四年）には⁸³、石動山天平寺はこの地に渡り住んだ渡来人の信仰の中心ではなかつたかとされ、古くから星辰信仰と

⁸⁰ 沖浦和光・川上隆志著『渡来の民と日本文化―歴史の古層から現代を見る』（平成二〇年）

⁸¹ 『古代地域史の研究』（昭和五三年）・『茜さす日本海文化―北陸古代ロマンの再構築』（昭和六四年）など

⁸² 『日本海文化の形成』（昭和五九年）など

⁸³ 林屋辰三郎『日本海文化』の形成『日本海文化の形成』（昭和五九年）所収

修験道に基づく仏教寺院として知られているが、その前身は道教の山上の道勸として成立したのではない。さらに神仏習合によって複雑化し宝満権現は、日本の神ではなく異国神と考えられるとされている。道教とされているが、民間における陰陽道との差異の多くは不明であり、それらを一つ一つ検証することはできないが、陰陽道の入り込む余地が大いにありまた受け入れるだけの素地が充分ありえると思われる。

浅香山木氏は「コシ地域群では、ヤマト・カワチの王権による政治圧の浸透が比較的遅く、渡来人集団とその保有する文化が、少なくとも律令体制の確立以前においては、それほど強力な屈折・変容を経験せずに、渡来のままの姿で、比較的長く、その主体性を維持し続けたことを示唆するものといえる」³⁴とされており、コシ特に能登地方は渡来系の文化がそのまま移入され、維持されてきたのであろう。

上田正昭氏³⁵によると四段階に分けられ渡来しているとされ、第一段階が弥生時代前期、第二段階が四世紀末から五世紀にかけて、第三段階が五世紀後半から六世紀初頭、第四段階が七世紀後半とされ、この渡来系の人々は水稻耕作、金属器の高度な技術を伝来した。千光寺のある砺波地方だけでも南砺市高瀬の越中一宮と称する高瀬神社は、渡来系伝承を持っている。また南砺市安居の高野山真言宗安居寺は、養老二年（七一八）にイ

ンドの僧善無畏三蔵により開基されたという伝承がある。

砺波地方には奈良時代に、東大寺の大仏造営事業に多大な貢献をした豪族利波臣志留志がおり、東大の莊園が四つ設定されている。志留志は砺波郡を本拠とし、奈良時代の郡司級地方豪族であり、天平一九年（七四九）東大寺の大仏の知識米三千石を寄進し無位から一躍外従五位下に叙される。天平神護三年（七六七）越中員外介に任じられ、東大寺に墾田百町を寄進、従五位上になる。越中国内の東大寺領莊園の検校を行い、文書や絵図に署名を残し、宝龜一〇年（七七九）に伊賀守となつている。地方豪族が財力を背景に国守にまで昇つた例は少ないとされている。東大寺お水取りの過去帳に「米五千石奉加利波志留志」と記され、³⁶今も毎年読みあげられている。³⁷知識米三千石は、おそらく中世期の般若野莊の一部だろうとされている。この大量の米増産には渡来人の高度の水稻耕作の技術があるはずである。また最近発掘された砺波市久泉遺跡の「大溝」の遺構が直線状の人工的に堀削され、極めて大きい溝であることが確認された。また同時に建物遺構もあり、八世紀後半から九世紀前半にかけてのもつとされている。また大溝は八世紀中ごろ、大規模な墾田の開墾のために堀削されたものとされている。東大寺領石粟村の墾田の用水源であつた可能性が高いとされている。³⁸これらの地

³⁴ 米沢康著『越中古代史の研究』（昭和四〇年）

³⁵ 「久泉遺跡（砺波市）の大溝・建物遺構―古代東大寺領莊園との関連―」『古代・中世遺跡と歴史地理学』（平成二三年）

³⁴ 「古代の日本海とコシ」『古代地域史の研究』（昭和五三年）

³⁵ 『帰化人』（昭和四〇年）

方にあつて大溝建設には、高度な土木技術が必要であり、渡来人の卓越した技術が駆使されたと考えられる。また江戸時代の地誌『越中旧事記』[※]には別所七山の伝承を記している。「此別所七山は山の尾七ツ食違ひ出て其間を川水めぐり名がるゝなり景色面白き所なり此七山の伝説は昔頼成と云福有のものあり一人の娘を持つともより容貌比ひなし人あまた心を寄する一日頼成云比高の穴田の地は水の手寄なき野なり是へ水を揚る人あらば我娘を嫁せんと此事あまねく伝ふ爰に一人の男来りて云此野に水あげれば娘を予にあたへんやと頼成諾しその夜後山を突抜て川水野へ至らんとす頼成是を見て人間の業にあらざ龍蛇のわさなるべしと思ひ合する事ありとて多く人夫をかけて水口を防きて是を止む如斯して所々に山を築きて止めけるよし是今の七山なりと云又此邊に頼成村という頼成が居せし所なりと云妄説なれど里人の云伝ふ儘に爰に記す」とある。この伝説もまた「大溝」と同じ高度な土木工事を行った渡来人のイメージが強い感じる。

ところで米沢康氏[※]は、帰化氏族をめぐる古代北陸の歴史的動静には、単なる辺境に留まらない動的なものであつたとされ、『越中国官倉納穀交替帳』に砺波郡擬主帳秦人部吉綿（天長四年十一月二十一日条）、砺波郡転擬少初位下秦人部益繼（天長七

年八月三日条）の秦人部氏の名が見える。また同帳には砺波郡擬大領正六位秦忌寸常岡（寛平三年三月二十九日条）にも秦忌寸氏の名が見える。秦氏は帰化人であり、その末裔がこの地に存在したことが推察されるとしている。重層的砺波地方には渡来人らの痕跡を残しているが、千光寺に残された富山県指定文化財である白鳳時代の銅造観世音菩薩像などがあるが、これらも渡来人らの残した残像なのかもしれない。また民間に広く信仰されていた道教や陰陽道も、何らかの影響を与えていたようにも思われる。

おわりに

富山県西部の高野山真言宗の古刹芹谷山千光寺の開基伝承を持つ法道仙人について、この地方の古代の民間信仰について探ってみた、このような研究の試みは考古学者藤田富士夫氏[※]など行われ興味深い。法道仙人を道教の神仙思想が反映しているとされている。田中久夫氏・村山修一氏諸論文などに刺激され、法道仙人や知徳法師と陰陽道について長年関心を抱いてきた。「正徳社号帳」は、江戸時代中期のこの地方の堂宮を記したものであるが、それは、何社かは、古代や中世の信仰のありようも垣間見ることができる貴重な資料でもあつた。

※ 富山郷土研究会編『越中旧事記』（昭和七年）

※ 「古代北陸と帰化氏族」『古代文化第九卷第四号』（昭和四九年）・

「越中の帰化人覚書」『越中史壇第三八号』（昭和四二年）

※ 「インドから飛来した仙人」（毎日新聞昭和六三年一月二三日）・

「日本海文化の国際性」『日本の古代2 列島の地域文化』（昭和六一年）

この地が古代や中世には躍動感溢れるいきいきとした地であったことに驚いた。そして日本海文化との関わりや、地方豪族の砺波臣志留志の大胆さ、渡来人などの先進的な高度技術の移入など、先取性に富んだこの地が、実は古代からの風土であることが小論で言及でき、砺波地方の古代における信仰や先駆的な地域であったことについて、また一石を投じることができたと思っている。